

第2回国連軍縮特別総会における
荒木武・広島市長の演説

昭和57年6月24日

議長

財団法人広島平和文化センターの会長であり、広島市長の荒木武であります。

37年前、人類史上最初の原子爆弾による惨禍を被った広島の前市長として、また被爆者の一人として、各国ならびに全世界の人びとに訴えます。

議長

1945年8月6日、月曜日、午前8時15分、突然一発の原子爆弾が炸裂し、一瞬にして広島市は壊滅したのであります。家の下敷になった両親を助け出そうとする傷ついた子供たち。全身ずるむけの裸を曝し、安心してしゃがみ込む母と子。眼球が飛び出し、顔面血だるまの娘。川の中に折り重なって浮ぶ死体の数々。“水、水”と息絶え絶えに水を求める声……。この世のものとは思えない凄惨な生き地獄でした。

その惨状は今も脳裡に焼きつき、惻々として胸を突き、痛恨の情を禁じ得ません。

広島市では35万人が被爆し、即死した者を含めて4ヵ月間に、実に14万人以上が無惨にも殺されたのであります。かろうじて生き残った人びとも放射線の後遺症でその後死亡し、今なお多くの人びとがケロイドや白血病、悪性腫瘍などで、肉体的にも精神的にも苦しみつづけています。

核兵器がもたらす被害の特質は、通常の戦争では想像できない大規模な破壊を、瞬間的に、広範囲に等しく引き起こし、老若男女の区別なく非戦闘員を巻き込んで無差別に殺りくするものであり、人類の生存を完全に否定し地球を破滅に至らしめるのであります。

“軍縮と安全保障問題に関する独立委員会”のオロフ・パルメ委員長は、広島で「ビルの石段に影だけを残して、人間は数千度の熱線で灰と消えた。核戦争が起きれば地球には人間の影以外に何が残るであろうか。限定核戦争が可能だとする無責任なことは語れない。今こそ、われわれはヒロシマに学ぶべきだ。」と訴えられました。

議長

広島市民はどんな理由があろうとも、再び核兵器を使用させてはならないと固く決意しております。

そして、過去の戦争の反省のうえにたって、戦争放棄を明記した日本国憲法の本質

に則り、恒久の平和を誠実に実現しようとする理想の象徴として広島市を建設するため、政府に働きかけ、“広島平和記念都市建設法”を制定し、これを基調として懸命な努力をつづけているのであります。

「安らかに眠って下さい 過ちは繰り返させぬから」——広島原爆慰霊碑の碑文は、この碑の前に立つ一人びとりが平和を誓い合う言葉であり、過去の憎しみを乗り越え、悲しみや苦しみに耐えて、全人類の共存と繁栄を願う真の人道主義に立脚した“ヒロシマの心”そのものであります。

議長

私は広島市民を代表して、何よりもまず、核実験を即時全面的に禁止し、あらゆる核兵器を凍結して、これを廃棄するよう強く求めます。

そのためには、被爆地・広島で被害の実態を確認することが原点になるものと確信いたしますので、米・ソを始めとする核兵器保有国の首脳者や各国の指導的立場にある人、さらに次代を担う青少年が広島を訪れることを切に望みます。

また、広島で平和と軍縮のための首脳会議を開催すること、広島に平和と軍縮に関する国際的な研究機関を設置することを提唱いたします。

さらに、ヒロシマは心と同じくする世界の都市が互に連帯することを呼びかけます。都市と都市とが国境を越えて、人種の区別なく連帯し、共に核兵器廃絶への道を切り拓くことは核時代の新しい平和秩序の確立に大きな力となることは疑いありません。

議長

ヒロシマは単なる歴史の証人ではありません。ヒロシマは人類の未来への限りない警鐘であります。人類がヒロシマを忘れるとき、再び過ちを犯し、人類の歴史が終えんすることは明らかであります。

以上のことを強く訴えて、私の演説を終わります。

ありがとうございました。